

④ 金剛經の註疏書に於て感心功德持驗記の機は三分の一を占めている事は付に本經の書寫功德のパートを利益的に受容してゐる事を示すものである。

(四)

以上瞥見せし如く經に於て帰敬辭の序する事は身とするに足らず本經にても *namo bhagavatya tanyā prajñāpāramitāya* と有するのであるがかくも讃嘆の帰敬文を有する事は論書に於ては普通であるこの概念を持たされてゐる故に非常に珍と感ずるのである。他に於ける例無きやと云ふに漢學の爲わづかに八十頌般若一品の其一頌の般若帰敬文を見出すにすぎない。①これは智度論十八卷の般若讃嘆偈と強度の等象性を有し羅羅羅跋陀羅の作とさ小てゐる。②内容に至つてはウチン文帰敬文よりは格段の形而上學的内容を含んでゐるものであつて兩者固にはいささかの等象性も有らない。他に等象性を求めて金剛經関係内のものを見る。モンゴリアンテキストを見ると、

「佛に歸命し奉る。法に歸命し奉る。僧に歸命し奉る。

印度語に *Anga-vajra-śāhika-prajñā-pāramitā-*

manā-mukha-yama-sūtra 西藏語に *iphoq-*

pa-sa-rak-kyi pha-rol-tu phyin-pa

ndo-ye good-pa shes-tya-in thag-pa

chen-pokī-mdo 蒙古語に、聖金剛を以て斷ず

るもの智の彼岸に到れりと台づく大衆經。一切の佛

と菩薩とに礼拜し奉る」とあるのみにし更に彌勒無著世親功德施造の論書の帰敬文を見るに何ん等閑派を有せず他のテキスト亦等象性の文を有せず此處に于處に金剛經帰敬文は全く于處文独自のものにして翻訳過程に於て于處にて附加され于處佛教者の態度をあらはしたものと考へらるのである。

① *Aśtaśāhika prajñāpāramitā sūtra*

cy mtra 1022

② 宇井博士 印度哲學研究第一卷 三三頁

③ 橋本晴末 蒙古本、前出全三頁及び三三頁參照經題の辭教に於てウチン本と異なるが

西藏語の辭教と同意なり、ただし蒙古本は「タン・デルゲ」版等と合して西藏語の

翻訳と考へらる。

④ 正藏 No 1510, Vol 25, P 57a, No 1511, Vol 25, P 81b

Vol 1515, Vol 25, P 87a etc.

飛鳥時代の佛教

——特に其源流と流伝に關して——

伊勢寛順

序

凡そ飛鳥時代に於ける佛教は聖德太子に元づくもの

であり、又日本の佛教は太子より始まると云つて過言ではないのである。何故なれば佛教伝来後いくばくもなく聖徳太子の御出現により日本佛教の方針が定められ、太子は新しい国体の本義、憲法の制定、大陸との交通等を建てられたが、其根本には其受容せられた佛教精神が動いてゐるからであり、又日本の佛教として此処に育成せられ発展を遂げたからである。日本は印度の佛教を直接に伝へたのではなく支那佛教の受容の上に展開したものが日本佛教である。故に此小稿は具源流及び流伝の概要に就て考察せんとするものである。

本論

先ず支那大陸に於ける佛教に關しては印度から西域に伝播した佛教が、後漢の明帝の御代西域の安息と月支との伝道僧によつて翻譯せられた諸佛典によつて發達の端緒を叩いてゐる。以て宋、魏、蜀の三国から西晋東晋の兩時代を経て大分盛んになった。殊に東晋の時代には長安を中心として繁栄した龜茲国の鳩摩羅什を首領とする一大教団が起り、長安の教団は羅什門下の四哲（道生、僧肇、道融、僧叔）を始めとして三十の学徒が集り翻譯事業が空前の勢ひを以て始められ、繚訳せられるや夫を講ずる事が又盛んに行はれた。又羅什によつて支那で初めて宗派分裂が起りそれに共ない教理の發展或は繚訳せし佛典が佛教各宗に互つてゐる事からして羅

什以後に於ける支那佛教の大勢は殆んど其大半を羅什系統によつて占められる如くである。併し乍ら其影響は隨朝に至りて嘉祥大師吉藏が現はるるに至りて大いに見えて来るが次の南北朝までは却つて法華經と維摩經の研究が盛んに行はれて、當時の人心に非常な影響を及ぼして居る。然し注意すべきは羅什の繚訳は經律論凡そ七十四部三百八十卷に上り、頗る多方面に涉つてゐるが、これら外未より受容せられた諸佛典を如何に漢訳したかといふ事である。即ち自己の思想を含めてゐる事、或は羅什が如何程の外国の言語に精通してをつたかといふ事を考慮しなければならぬのである。凡そ以上に於いて羅什系の學者によつて研究された大陸佛教が如何なるものであるか、訳出せる諸佛典より見て、印度佛教に於ける最大の教義とも云ふべき竜樹提婆の大乗教が強力に支那佛教の發達方向を指揮して行つたと考へられる。然しそれと共に又法華、勝鬘、維摩、涅槃經等の教説及び成実論の思想まで加味されてゐる事は注目に価する。そして此佛教が先ず大陸より朝鮮に輸入されたのである。

凡そ支那より朝鮮に初めて佛教が伝来した事に就いては伝記によれば、高句麗の小獸林王の二年（A.D. 372）に前秦王始めて僧侶及佛經等を高麗に送るといふに始まり此年は東晋の咸安二年に當り、彼の羅什が姚秦主

興に迎へられ長安に入來した弘始三年十二月二十日より凡そ三十年前に當り從つて此時に羅什佛教が朝鮮に伝來したとは考へられぬ。以來大体支那佛教と朝鮮佛教との間に尸史に遺るほどの交渉はなかつたが、凡そ此は何に由るかといふに先ず年代より考ふればAD 386と576年の間で此は支那大陸に於いて五胡十六國の後年より南北朝の殆んど全体に渡る時代で、此當時にあつては西域民族の勢力が長城線を超えて支那大陸の北部にまで浸入し、漢族には之を征服するほどの勢力もなく、其當時に行はれた道教と佛教との衝突する事もあり、遂には大陸の北部に於て前後二回の法難が起つたのである。いはば佛教の後難時代を現出し、たが其爲に佛教の興隆は支障を來し、其流傳の殆どはない事當然である。思ふに此當時にあつて支那と朝鮮との間に尸史上に遺るほどの佛教の交渉はなかつたことも更にその重要な原因が此處に存するとも考へられる。さりとて全く其交渉がなかつたとも斷言されないのである。かの北魏の佛教藝術は朝鮮に移入せられ、やがてそれらは教口に伝來して飛鳥の佛教藝術となつて現はれ、又北地に起つた地論宗が成立して向もなく高句麗に伝播していた事等を考へると、ほそぼそながらも仏像聖卷等の將來もあつたであらうと考へられる。かく考ふれば地論宗の成立に先立つ事凡そ百年前に起つ

た羅什佛教も又大陸より半島に伝來していたと云へる。ちもそれ何時頃、誰によつても知らされたか確かな記録もなく、此は知る由もないが、然しすでに地論宗が伝へられる以前に於いて伝播していたであらう。然し此當時にあつて百濟には凡そ如何なる佛教が行はれてゐたかといふに伝記によれば百濟の祗園王の元年で此時胡僧の摩羅難陀が東晉より至るといふ事に初まり以來聖明王の四年(449)に百濟の沙川謙益が中印度に入り常伽那寺に於て律を學び梵僧の倍達多と共に律文を將來し、此を訳して七十二卷を成じ、又曇旭慧仁の兩師は律疏三十六卷を著すといふ記事よりして見ると此時に朝鮮において又入印の求法者が現はれるといふほど佛教ことに律學が発達してゐた事が知られる。しかも此當時支那大陸で相當律部の聖典が訳出研究されてゐたのである。又注意すべきは支那より百濟伝來した佛教は海路による南支那の佛教で即ち前述の羅什佛教を北支那佛教とすると此南支那の佛教は尸山を中心とせる慧遠である。然し長安に於て羅什門下より南方に移るものあり、或は直接羅什と尸山の慧遠との間に密接な文書による交渉があり、これらの事情の中に於いて此南方佛教が海路により百濟に伝來したのである。此は最初に支那より百濟へと伝來した佛教が東晉の佛教なりし事によつて知られ、又日本書紀に記

載する事件によつてもやはり百済と南支那と海路によつて交通してゐた事が知られる。従つて百済仏教はかなり南方仏教の影響があつた事は事実である。

新羅に於ける仏教は一言に云はば支那仏教を間接的に取入れたと云へよう。即ち高句麗或は百済の仏教が伝来したのである。又仏教初伝に關しては「三國史記」によれば高句麗より初めて伝へられると記してゐる。

かくして朝鮮に於ける仏教は即ち高句麗に於いては法難の爲あまりふるはなかつたが百済に於いては隆盛を遂げるのである。

我が口に於いて凡そ仏教の公伝は欽明帝の十三年

(552)とすれば、百済の聖明王の三十年に當るが、そ

れ以来我聖德太子の師僧である慧慈の来朝するまでには凡そ五十年近くも踰てるのである。此間に仏像、經

卷沙門などの来至する事故々あり、口史を見ると仏教

の初伝より推古帝の中頃に至るまでに朝鮮より我が口に伝來した仏教に關する記事が凡そ十六回ほどあり、

此中十回は百済五回は高句麗一回は新羅といふ割合になつてゐるから、之によつて凡そ當時我が口の仏教は百

済のそれをも多く受容した事が知られる。そして高

句麗の五回といふのは、敏達帝の十三年(527)に高

句麗の恵使が司馬達の子を度すといふ記事に初まり、

他の四回は何れも推古朝に入つてからの事を従つて仏

教が直接に高句麗より我國に伝來し始めたのは、百済よりも三十余年おくれて推古朝の末期に當り、後の持統帝の時に最も盛んであるから未だ太子の時代に殆んど新羅仏教の影響はなかつたと見られる。然らば太子時代の仏教は百済の仏教と高句麗の仏教とに影響された事になる。前記の如く當時の百済若しくは高句麗の仏教は殆んど羅什仏教を主流とする支那北地の仏教と考へられるが、しかもそれは單に般若皆空を根本とする三論四論を講學するばかりではなく又法華勝鬘維摩若しくは涅槃等の諸大乘經をも講學しなほ其上に成實毘曇若しくは戒律等にも關係するといふ頗る浩瀚な仏教だったのである。思ふに聖德太子によつて受容された仏教も又かゝる仏教であらうと考へられる。

結 論

かくて聖德太子の仏教は如何なる内容を有するかその大略が記されたが、もとよりそれは涅槃勝鬘法華維摩等大乘經の思想のみではなく、又成實毘曇の論載の思想をも包含してゐたといへよう。そして此迄の仏教が果約せられその焦点に於て表現されたものがつまりりかの世間虚假唯仏足與の御持言、行くは十七系憲法の舊敬三空章に外ならない、しかも從來聖德太子が法華勝鬘維摩の三經を一代仏教中から御選定になつたにつけて法華は念三歸一を説く仏教究竟の法であり、勝鬘

部派佛教に於ける

心性本淨説を繞る問題

香川 孝 雄

は勝鬘夫人なる俗形の女人の説法を記したもの、維摩は維摩居士なる俗形の男子の説法を記したもので、これによつて吾人はよく世間の男女に對する法と出世間の仏教の極則とを知り得るべくも、しかもこれを再考すれば太子が此三經を御覽びになつたといふのもつまり當時朝鮮を経て我口に伝來した支那仏教の一般的傾向を正確に認識し受容されたからであらうと考へらる。前記の如く其當時に我口に伝來した仏教は明らかに羅什仏教を主流とするものでしかも此系統の學者は何れも單に小品大品三論若しくは四論を研究した許りではなく、又勝鬘維摩法華涅槃等の中少々ともその何れかに精通していたわけを太子も又此仏教の影響を受けられたと考へらるるのである。

かくして推古天皇の御代に至つて多種多様な文化は一先づ一調和し飛鳥時代の文化となり仏教となるのである。又曰本の仏教として成立を見るに至るのである。以上を以てとりとめもない飛鳥朝仏教の源流ならびに流伝の概要を記し諸者の方から御批判を賜り今後の御指導をお願い致します。

心性本淨説を繞る問題は、部派仏教における部派相互間の種々なる議論の課題として取り挙げるべき興味深い問題であり、これを究めることにより、(勿論當時の部派の性格やそれを取りまく幾多の困難な問題の研究も更に必要なることは云う迄もないが)各派の人間論、仏性論の性格を把握することから出来る様に思う。

望月博士の論文^①には心性本淨をとるものは犢子部、大衆部であり、これを認めないものは有部、成實等であると言われている。そこでは心性本淨と直接記された聖論を資料とし、それを整理した結論であり、そこには舍利弗阿毘曇論や成實論の如き所屬部派のはつきりしない困難な問題も含まれているが、今考ふるに心性本淨説を肯定する部派は單に犢子大衆の兩派のみではないであらう。又成實論がこれに反對しているとも云へないのではないか、と考へている。

① 仏誕二千五周年記念学会篇、佛教學の諸問題と新收昭藏思想の整理につて

試みに心性本淨説に關して肯定の立場をとる資料を